（六三％）が話合いを効果的にする方法としては教師の発問、助言、などの指導技術や話題の選択などが挙げられている。（六九％）

五、自発的にするあいさつ（大会発表論文抄録25頁第5表参照）

六、絵本による話し合い指導について

話し合うための絵本を見せる方法については、年令による差はあまり見られなかった。また絵の中の文章をどのように扱っているかについて見ると、「話し合う前によんできかせる。」というのが、各年令を通じて最も多いが、三才、四才、五才の順に、わずかの差であるが、少しずつ少なくなっていて、話し合った後によんで聞かせることは、三才児と五才児では、かなりの差で五才児が多くなっている。

「絵本をつかって、話し合いをどのように扱っていますか。」では、三才児では、教師が先きに発問して話し合う場合が多く、こどもの発言から話題を見つけることは少なくない。五才児になると、こどもの発言から話題を見つけることが、三才、四才に比べて多くなっていることがうかがえる。

話題がそれた時の指導では三才児ではそのまま話させていることが多く、話題をもとに戻すことは、五才児になると四四％を示していて、三才、四才に比べて最も多くなってきている。

三才児は全体的にみて絵本に書いてある事物について話し合うことが最も多い。それが五才児になると事物について、内容について、感じたり考えたことなどについて話し合う率がそれぞれほぼ同じような割り合いを示していて、年令による差異が見られる。

（大会発表論文抄録23—27頁）

三年保育児と二年保育児の保育材に対する適応の変化

（第二報—言語関係）

神田寺幼稚園
森崎君枝・阿部明子・佐藤道子
米内みさ・井山不二子・小坂美保子
松村美佐子

保育の効果をより適切に高めるために、幼稚園での言語に関係する子ども達の成長ぶりを各月ごとにわたって整理してみた。

新入園児として過す一年間でも三才と四才では集団生活に適応してゆく過程が、時期的なずれは勿論、質的にも随分違った点が多いことが注目される。

三才では、まだ他の意識が少ないことから個々への働きかけをしないと行動に移せない傾向が暫く続き、次に、ごく身近かなものへ関心が発展、七月になって、おとなの話しかけも大分理解できるようになるが、知識的な考察が必ず伴うとは言えない段階。九月から十二月へかけて自分なりに理由づけようとする力と、自己中心の考え方なり行動から移行しつつある時期を経て、三学期には、質問に理由づけも含まれてその数も多くなる。しかし教師への話しかけが大部分である。

四才児は一応他を意識し、知的な発達からいっても全体への話しかけを理解し、自分が納得するまで質問する。観察物にさわって見ないと承知できない。自分が知っていたり経験することに結びつけ

て考えようとしている。十二月に入ると子ども同志の話し合いを通して簡単な解釈をつけるようになり、さらに探究的になるので子ども達同志での話し合いを通してより深いことにまで疑問をもつような指導が肝要だと思う。

年長組の三年保育児と二年保育児を比較すると、二年目児がお日様がたくさんでないから温度が低いと判断したり、雷が電気であることをつきとめて満足する等の想像的な段階を抜けきっていない良さがある。三年目児は雷は電気だけど、どうして音がするのとふしぎがる、喧嘩の処理も友達の考えを受入れて、自分達で解決しようとするなど、科学的な観察力や協力心、判断力も子ども達同志の交流の中で社会性と共に高まっていくことがはっきり示される。自分の生活に結びつけて解決しようとする時期、つまり四、五才の幼稚園での過し方が物事の考え方、処理の仕方を身につけてゆく上に影響が大きく、従って教材の与え方、環境構成の仕方、多くの見学、観察などの新しい経験をさせることが主要になって来るように思う。

生活発表の欄で考慮すべきだと思われた点は発表の形式である。三才の最初は勿論この型式は無理なので教師が話を聞いてやることが第一、友達の話題にヒントを得て話したがる頃から十名前後が円陣になって話し合いをする。三学期には小人数での生活発表やギニヨール遊びにも無理を感じなくなる。四才では人の前で話したくて我慢できない傾向にあるから話し合いの型式をとったり話題を与える。皆の前で発言する機会を作ることも工夫してよく、三学期になれば大勢へ話そうとする気持も出て、良く聞けるようになるから時期をあせらず待つことを考慮する必要があると思う。また、五才児組になると一組三十名以上になっても生活発表の型式をとることにさほどの無理がなくなるようだ。お話の聞き方にも進歩がみられ二、三日前にした話の続きをせがむ、筋のおもしろさより内容を理解して話の感想を述べるとか、その話材が他の遊びに展開するので、静かにきく事だけを主眼にせず感情の表現、内容の把握をより大切に扱う時期のあることを知っておくべきである。このように幼児はグループの中でめざましい変化をとげているわけだから、各年令における成長の過程を良く知った上で無理のない計画を作成し、なお一層高まり合える保育材、或いは保育技術をも含めてより適切な保育環境を設定する必要をあらためて感じたわけである。

（大会発表論文抄録15頁）

保育と発達

（二報—幼児期の話合いの方法とたしかめ）

保育問題研究会　天野　章

私どもは、おしゃべりな子、無口な子が参加している集団保育のなかで、それぞれの子どもが、ことばと行動とをむすびつけ、考え方を伸すには、どんな保育方法がよいか、その方法と子どもの効果はどうか、この点を共同研究の形でしらべてみた。

研究のなかみ　保育と発達の二つに分れる。

一つは、話合いという保育方法が、現状の保育実践のなかで、どのようにあらわれているか、ということをみた。（要約）

1、話合いの形をとりながら、保育者の説明に終っている方法。

2、子どもたちの話合いに保育者が参加しながら課題を拡げ、子どもたちに理解させようとする方法。

私どもは、1と2の方法を比較しながら、主として、2の方法に